

第十一講 文字テキスト

レポート講評：「言語論的転回と歴史学について」

歴史学における言語論的転回が提示している問題は次の二点に集約できる。ひとつは歴史家が研究の基礎に据える史料の真実性と客観性、さらには完全性への疑問、今ひとつは歴史家の史料解釈と過去の再構成に関する主観性、一面性、不完全性への疑問、が批判の主要な内容となっている。

これらの批判は「現実世界」を認識し、それを記録化する人間の能力の限界性に起因する。例えば今自分がいる部屋を見ているとする。その部屋にはテレビもあれば、机もあり、机の上には日頃愛用しているノートパソコン、スマートフォン、地元新聞、時計、三色ボールペン、メモ帳、何故かコーヒーの入っているマグカップがある。しかしこれは自分がいる「現実世界」の一部でしかない。私たちが目にしているのは可視光線の世界でしかなく、紫外線の世界はそもそも目にすることはない。さらに私たちの目はミクロの世界を認識できない。机の上にたまっている埃、埃よりも小さな微生物を私たちは識別できないでいる。さらに言えば、部屋、ノートパソコン、スマートフォン、地元新聞、時計、三色ボールペン、メモ帳という言葉によって抽象化を行っている。例えばノートパソコンがどのようなもので、その使用経歴や中に入っている情報などのついては一切明らかにされていない。今、私の部屋の状況を説明するのにそのようなデータは必要ではないのでここでは一切が省略されている。

私たちは予め関心を抱いているものに注意が行き、強く記憶に焼き付く。この記憶の濃淡は「現実世界」を部分化し、選択的認識と記憶に値するという価値判断によって生じた結果である。しかしこのノートパソコンが盗難に合い警察に被害届を出す時にはこれらのデータは必要となってくる。そうするとノートパソコンのメーカーはどこで、何年の製造なのか、型式番号は何であるのか、ボディーの色は何色なのか、購入時の金額はいくらなのか、経年による価値の低下で盗難時の評価金額はいくらになるのか、どこで何時ころ盗難に合ったのか、或いは何時盗難に合ったのに気付いたのかなどが問われることになる。このように再現される「現実世界」の違いは関心の違いによって方向づけられている。そして警察の調書に質問項

目が予め決められていてその項目に従って盗まれたというノートパソコンの「現実世界」が描き出されてくるのである。このような現実世界の部分化(=「現実世界」)、選択的認識、記憶の価値評価と序列化はカントのいう先験的な概念、言語論的転回論者の言う「言葉」を通して行われる。ここでは先験的な概念と言葉を同質のものとして扱っている。

では史料の不完全性、一面性、主観性に基づいて歴史家が選択的に抽出し、価値評価によって重要度を差別化して配列された「事実」群とそれらの解釈によって再構成される「過去」はフィクション、「物語」でしかないのか？歴史家は史料の不誠実性、不完全性、部分性、主観性、また歴史家自身の認識能力の限界性、判断と評価における主観性、構成と叙述における全体性の欠如を十分認識している。そしてそのように認識しつつ「過去」という「現実世界」と向かい合ってきた。その際歴史家には過去を捏造しないという職業倫理は強く働いてきている。付け加えれば歴史を政治プロパガンダの道具化することへの嫌悪感も歴史家にはある。なぜなら現実世界は常に多面的であり、矛盾し合う記憶が混ざり合わさっていることに付き合ってきているからである。過去はつまみ食いも許さないし、一部の記憶でもって残りの記憶を抹殺することも許さないからである。過去に対する認識や評価は変わることがあっても、過去そのものを変えることはできないことを知っている。選択、評価、解釈において思考や論理の合理性を基準としてきた。

レポート講評：「写本と刊本の比較（ルトフィー・パシヤ『宰相の書』）」

イスタンブル大学写本が5行で、アクギュンデュズの刊本が10行。

刊本には写本にない文が（・・・）の中に付け加えられていたり、写本の文が改変されている。

写本にある **Senede** が刊本では **Hele** に変えられているし、写本にない **bes**、**edüp**、**el-âyet** というクフラーンの引用が刊本に見られる。

アクセント記号の有る無しは関係ない。

文字テキストとは

文字（数字を含む）で記されたもの
日記・伝票・文書・本・手紙・碑文など

テキスト批判の必要性

必ずしも現存の文字テキストは完全ではない

1. テキストの欠損

印刷された刊本と手写本は異なる

多くは文献学者や碑文研究者による校訂を受ける
文字なのか傷なのかの判別のつかないことも有る

2. テキストの記述レベルの問題

実体験に基づくのか、伝聞に基づくのか

実体験：体験者が経験した局所的な知見

体験者の主観が記述に影響

伝聞：間接的知見の問題

真実の証明の欠如

噂や脚色された作りごとに興味を引く

書き手の資質に左右される

限られた知識

洞察力の欠如

叙述能力

オリジナルかセカンダリーか

テキストの来歴の確認の要

オリジナルとの距離＝信憑性の高低

オリジナルか、写本を通じてか

写本を繰り返すことによる誤写、書き落とし、付加

註が本文に入ってしまう危険性

他のテキストの混入

3. 語句の意味内容の変化

同一語句であっても意味内容は時代や社会によって異なる

Künstlerisch 芸術的・西南ドイツ語では人工的

Künstlich

4. テキストの性格を見極める必要性

事実を記述することを目的とする行政経済文書か
それとも自己を正当化する傾向の強い報告書とか日記か
プロパガンダの可能性

自己の正当化

競合者への意図的な過小評価（または過大評価）

事実の局限性（現実のひとつの切片でしかない）

選択される事実と無視される事実

例：聖人伝（テクラ外伝）

結婚を拒否・母親との対立（エレクトラ・コンプレックス）

パウロ：引き立て役

ライオン（牝）：競技場でテクラを守る

皇女が入信

政治的文書・外交文書・回顧録・人物評伝などに多い

第一次大戦の各国の外交文書

マッカーサーの回顧録：日本の機動部隊はフィリピン周辺の
海域に・フィリピンに飛来した日本の戦闘機は台湾から
というのは信じ難い

テキストの信憑性

整合性・矛盾・誤写・誇張・意図的な削除・無視などの追及

テキストそれ自体の批判的分析が必要

表現形式・書体・文体の整合性：当該の時代に整合しているのか

人は自分に都合の良い情報、想定していた状況に合う情報を好む

地図上の矢印は明治以降軍事用語として入ってくる

地図の表記：北が上なのか東が上なのか？

山の書き方

「彼女」「アイ・ラブ・ユー」など

ひらがな表記とカタカナ表記の性差と時代性

大文字と小文字の区分（カロリング・ルネサンスまで無し）

句読点（古代にはない）

◎とΘ・ϸとΣ・HとE・OとΩ

「テミストクレスの決議碑文」✓

前 480 年ではありえない

提案者の所属区を明記している

碑文の形式（整い過ぎている）：「[神々]。評議会及び民会
によって決議された。フレアリオイ区のネオクレスの子
テミス [トク] レスが提案した。ポ [リスを] アテナ、
アテナイの [守護神]、並 [びにその他] . の神々に国土の
為に守護し [夷] 敵の民人に対して防衛するために委ねる
べし。 ...」

出土地がアテナイでなくトロイゼン

Σ、H

ジェームズンは前 4 世紀のものとは推定

反マケドニア

「話がピーマン」（1980 年代に流行）：中身がない（異説あり）

「話がやばい」（2010 年代に流行）：素晴らしい

テキスト内の整合性

文体は一貫しているか

書体は一貫しているか

書き足されていないか

固有名詞の表記は統一されているのか

動詞の人称・時制の文法的整合性

名詞や形容詞の性・人称・格の整合性

文の平均的長さとそれからの偏倚

テキスト間の整合性

同時代のテキストとの整合性

他のテキストに記述されているか、いないか

テキストの素材の時代的整合性

酸性紙

筆記具

絵具

他のテキストとの比較による「ウラ」を取ることの必要性